

論文名：井上靖の研究  
——日本人僧侶像をめぐって——

新潟大学大学院現代社会文化研究科  
氏名 李 鈺 (LI Yu)

---

## 要 約

本論文では、井上靖の仏教・僧侶を題材とする四篇の小説（「澄賢房覚書」、「僧行賀の涙」、『天平の甕』、「補陀落渡海記」）を取り上げ、日本人僧侶像をめぐって、考察を行った。先行研究を踏まえた上で、小説の典拠、僧侶像、主題という三つの観点に着目し、作者の創作意図を明らかにした。

序章では、本論文の「研究対象と背景」、「研究の目的」、「論文の構成」の三つの部分を説明した。

第一章「井上靖の仏教文学の背景」では、日本近代の仏教文学における井上靖の作品の背景を分析した。第一節は、先行研究を参考にした上で、日本近代文学における仏教文学、とくに仏教小説の数、種類などの傾向を論じた。第二節では、日本近代文学における井上靖の仏教文学の位置づけを明らかにした。井上靖の記者時代に蓄えた仏教知識、仏教にかかわる専門家との関連性を検討した。井上靖は、自身の仏教文学に大きな影響を与えた人物として井上吉次郎と、荒井寛方画伯の名を挙げており、それらの人物を論じた。また、『高野山往生伝』は小説「澄賢房覚書」の典拠資料であると推測した。

第二章では、井上靖の仏教文学における初の小説「澄賢房覚書」を取り上げた。

第一節では、本小説の創作背景、典拠を中心に考察した。井上吉次郎の『文観上人』の「註」と「解」で言及された立川流は、井上靖が高野山に注目するようになった原点であると推測された。水原堯栄の立川流に関する研究を参照した上で、破戒僧「澄賢房」の僧侶像を設定した可能性が高い。井上靖は小説の「日記の断片」の添削加筆を中川善教（水原堯栄の弟子）に頼んだ。高僧については、水原堯栄をモデルとして、彼の師水原弘栄の名の読み方「こうえい」を借り、宏栄という人物を設定したと考えられる。

第二節では、主人公澄賢の僧侶像を中心として考察を行った。「袈裟」を装着しながら「烈しい」人生を送った澄賢像を述べた上で、高僧宏栄の「冷たい」目によって、煩惱から解放された澄賢の生涯を暖かく「回向」した。「情痴」と

言われた澄賢は三人の女性との恋情で世間から「破戒僧」の悪名で呼ばれた。二十年をかけて『般若理趣経俗詮』を完成させ旧友宏栄に渡したかったが、「一生不犯」である高僧宏栄の「冷たさ」の前に断念する。最後に、漸く「高野に帰ってきた」澄賢は、「安穏な満足な気持」を抱き、「完全に深い休息」の中へ落ちて行ったのである。

第三節では、「澄賢房覚書」と「ある偽作家の生涯」を取り上げ、両作品の共通点について考察した。井上靖は「日記」を媒介として、登場人物の烈しい一生を語っている。澄賢の凍死と原芳泉の急死の場面を比較し、極めて類似しているという結論を出した。最後に、澄賢と原芳泉の死因を考察し、主人公の「冷たい」生涯が共通することを明らかにした。「澄賢房覚書」は僧侶の話であるが、「ある偽作家の生涯」では、偽作家の生涯を描き出した。小説の舞台は仏教と俗世の物語であるが、主人公はいずれも無名または悪評のある人物として描写されている。二作品において、本来無縁でありながら、偶然に主人公の人生にのめり込んでいく語り手がいる。それは「私」である。二つの小説は、語り手である「私」の視点を通して、主人公の境遇を描いている。悲しい生涯を送った人物として、僧侶であれ現代画家であれ、その職種には関係なく、人間としての「哀れ」や「淋しさ」の感情は共通している。

第三章では、「僧行賀の涙」を取り上げ、行賀の姿の変容を中心に、考察を行った。

第一節では、在唐期の行賀の姿に着目し、日本に帰った後、「涙」を流した際の心境を推察した。行賀の外貌は年齢に相応せず「老け」、「烈しい読書のため眼を悪くして」いるのである。彼は十五歳から唐の書籍を読み込んでおり、知識に憧れる。在唐三十年余り、行賀は唐語に熟練しており、唐土の生活に慣れ、入唐の目的通り勉学に励む。日本に帰る機会を掴めなかった後は、写経の仕事に没頭した。次に、史料の記述と小説本文の行賀の話と比較した上で、作中の行賀の僧侶像を論じた。行賀が検問に答えられなかったのは、史料の記述「粗忘言語」の部分と一致している。また、「唯識僉議」も本文の内容と対応する。行賀が「滂沱」として涙を溢れさせた気持ちは、史料では「大愧」と記述されている。一方、小説の行賀は日本語が「不自由」のため、「涙」が「滂沱」として頬を流れ落ちたが、井上靖は本文に「愧」という言葉を使用しなかった。入唐当初、吉備真備より眼に怯えがあるとと言われても彼は無言で対応する。「不服」の態度を隠し、「暗黙」のままである。終盤部分における、行賀の「滂沱」の「涙」に隠された心情は「いろいろの批判」に対する「抗議」であると考察した。

第二節では、井上靖の「僧行賀の涙」、『天平の薨』における、行賀、業行、普照三人の僧侶像を比較した。まず、作者の創作メモ、中村詳一訳の『唐大和

上東征伝』、両作品における三人の「写経の姿」を整理した。先行研究を踏まえながら、史料上の行賀の像を明らかにした。次に、行賀を中心に、虚構の僧侶業行、実在の僧侶普照との比較を行った。最後に、写経に没頭する僧侶像は、荒井寛方をモデルとして創作した可能性が高いと論じた。

井上靖は高木卓の『遣唐船』を読み、それが「僧行賀の涙」の創作動機となった。第三節では、小説本文を高木卓の『遣唐船』と比較し、『遣唐船』に描かれた遣唐使たちの姿が小説本文に投影されている可能性は低いと結論づけた。また、行賀の眼を通しての「旧友」仙雲の姿を考察し、彼の「狂人のような」僧侶像を明らかにした。最後に、小説の「嬉娘」は「父と離れて住むのは嫌」であり、その「嫌」という気持ちには学生時代の井上靖の心境が投影されていると指摘した。

**第四章**は『天平の薨』を取り上げ、創作背景と留学僧の像について考察を行った。

第一節では、井上靖の自作解題に着目し、安藤更生が井上靖に『天平の薨』の執筆を勧め、業行が写経した経巻の名の設定を助言したと指摘した。また、『天平の薨』の典拠は通説の『唐大和上東征伝』だけではなく、安藤更生が井上靖に提供した『鑒真大和上傳之研究』の草稿及び中村詳一の訳本も典拠であると考えられる。さらに、小説中の「薨」の送り主は戒融の可能性が高いと推測できた。最後に、天平時代の文化交流事業に捧げた無数の無名の僧侶たちの業績が薨というものに具現化され、唐招提寺の両端に飾られた薨は留学僧たちの生涯の縮図であると考えられる。

第二節では、『天平の薨』の五人の留学僧（普照、栄叡、業行、玄朗、戒融）の僧侶像を中心に考察した。まず、『唐大和上東征伝』と『天平の薨』に同じように記された栄叡と普照に着目し、二人の対照的な僧侶像を考察した。次に、普照を中心に、鑒真と出会う前の普照の内面描写を考察した。鑒真と出会った後は、渡日計画を進め、鑒真と普照の師弟関係も変化している。

さらに、『天平の薨』における普照と業行の二人の僧侶像を考察した。安藤更生の『鑒真大和上傳之研究』によると、歴史資料に記録された普照と業行の二人は同一人物である。しかし、井上靖は普照を業行の理解者として描いている。作者が普照を主人公にし、普照と業行という二人の僧侶として創作した意図を明らかにした。また、写経を通じ、普照は業行の気持ちを受け入れる。経典に対する考え方についての考察を通して、普照が業行の経巻に執着する気持ちを理解したということを論じた。最後に、僧侶業行に見える「業」について考察した。「業」という仏教用語は「行為」という意味であり、業行においては、写経に没頭することに当たると解釈した。業行の一生とは「業」を積み重ねてい

くことなのである。

第五章では、「補陀落渡海記」を取り上げた。渡海僧金光坊にとって、渡海＝往生＝死である。渡海信仰の意味や渡海後の往生に金光坊はあまり興味を持たず、生きながら渡海することが受け入れられない。井上靖の創作した金光坊は、その意味ではあくまでも「近代人」の死生観に近い僧侶であり、自分がなぜ世間の期待で入水死するのか、渡海信仰の意味を見出そうとする人物であると考えられる。

第一節では、井上靖が参照した歴史資料の一部分を調査した。そこで、平八州史の手書き資料が小説に書き込まれていることが明らかになった。また、神奈川近代文学館に所蔵された二河良英の資料により、彼から提供された資料が井上靖の小説の種になっているということが明らかにした。最後に、各版本の「補陀落渡海記」の結末部分を比較した。金光坊の渡海前の言動描写を比較し、主人公の渡海信仰への考え方を明らかにした。そこから、作者の創作意図を推測し、死に直面した際の、金光坊の「烈しい怒りと抗議」という僧侶像が形象されたと考察した。「求補陀者」は、渡海より、「心」の修行が重要だということである。世間の期待に従うより、自分の心の声を重視すべきということが、金光坊の渡海信仰に対する考えである。

第二節では、渡海上人の像に関わる先行研究を整理した。小説における渡海僧たちの像を考察し、金光坊の視点から改めて七人の渡海僧の様子、渡海の動機をかえりみた。金光坊は今までの渡海上人と違い、真剣に渡海のことを考えている。彼の、渡海できる「心境」になるまでは渡海できないという思いは、何人かの理解を貰えた。しかし、結局、本人の希望は無視され、主人公の渡海は世間の見方に従うことになった。最後に、金光坊の二行の詞に着目した。井上靖がその詞を通して、金光坊の「烈しい怒りと抗議」の「心境」を描いたことを明らかにした。同時に、「抗議」という言葉で、世間の見方に翻弄された渡海僧の像を考察した。

終章では、各章に明らかにした主な内容をまとめ、今後の研究課題を提示した。